

腰痛治療の最前線：椎間板再生医療の実現

日時：2022年7月14日（木）17:00～17:55

会場：講堂+Zoom配信

(ミーティングID: 819 7116 3437 パスコード: 556788)



座長：大竹 剛靖 先生（副院長、再生医療科 部長）



酒井 大輔 先生

東海大学医学部外科学系整形外科学・准教授

日本整形外科学会（国際委員会委員会委員、腰痛診療ガイドライン委員会委員）

日本脊椎脊髄病学会評議員（国際委員会委員）

日本腰痛学会評議員

日本側弯症学会（国際委員会委員長）

American Academy of Orthopaedic Surgeons

/ Orthopaedic Research Society: Member

International Society for the Study of Lumbar Spine: Active Member

North American Spine Society: Corresponding Member

腰痛の原因の一つとなる椎間板変性は労働者人口から高齢者の口コモまで幅広く影響を与え、その社会、経済的影響は大きい。椎間板変性の発症メカニズムは2000年代まで正常な椎間板とその細胞を取り巻く「ニッチ」すなわち微小環境は十分に理解されていなかったが、この20年で多くの新発見が報告された。われわれは椎間板変性症の新規治療法として細胞移植による再生医療に関する研究を続けてきた。小動物の基礎的実験から大動物を用いた前臨床試験を経て、2009年からは自家活性化椎間板細胞移植について、臨床研究を行い、9名の腰痛患者に対し、細胞移植による腰痛治療の有効性と安全性を確認した。さらに、自家移植のコスト面での障壁を越えるべく、米国企業と共同で新鮮屍体由来の再生医療等製品の開発を行い、大動物での非臨床試験においてその有効性、安全性を確認、2019年5月からはfirst-in-human治験を開始した。また、屍体ドナーではなく、若年者椎間板ヘルニア組織をドナーソースとした、再生医療等製品について国内製薬企業と新会社を設立し共同開発している。さらには次世代の製品としてiPS細胞技術を用いた遺伝子治療、テーラーメイド再生医療製品の研究開発に取り組む。本講演では椎間板変性の分子機構の理解を、最近の新たな知見と絡め、椎間板内療法の実現、東海大学でのこれまでの歩みと、椎間板再生医療が一般化されるまでの道筋を示す

担当：再生医療科事務 平田（PHS9328）